

抄読会 2022/1/19 担当 増永愛子

Thorax 2022;77:364–369. doi:10.1136/thoraxjnl-2020-215681

Lung transplantation for acute exacerbation of interstitial lung disease

Mwelwa Chizinga, Tiago N Machuca, Abbas Shahmohammadi, Divya C Patel,

Ayoub Innabi, Bashar Alzghoul, Vanessa Scheuble, Mauricio Pipkin,

Borna Mehrad , Andres Pelaez, Christine Lin, Diana Gomez- Manjarres

背景 間質性肺疾患の急性増悪（AE-ILD）は、高い死亡率を呈し、有効な薬物治療がない。肺移植は AE-ILD 患者にとって救命可能な選択肢となり得るが、その役割は十分に確立されていない。本研究の目的は、AE-ILD 発症時の肺移植が、病勢安定期の肺移植と比較して、移植後の転帰に影響を与えるか否かを明らかにすることである。

方法 2015 年から 2018 年にフロリダ大学に入院した AE-ILD の連続症例を対象に後方視的研究を行った。対照群は、同期間に肺移植に登録された安定した

ILD 症例とした。主要評価項目は、AE-ILD で入院した症例の院内死亡率、移植症例の 1 年生存率とした。

結果 AE-ILD で入院した 53 人のうち、28 人が薬物治療のみ、25 人が肺移植を受けた。移植を受けた AE-ILD の全ての患者は生存退院したのに対して、薬物治療のみを受けた AE-ILD 患者では 43%しか生存退院できなかった。同じ期間に、67 人の安定した ILD 患者が肺移植を受けた。移植を受けた患者の 1 年後の生存率は、AE-ILD 群と安定した ILD 群で差がなかった (96% vs 92.5%)。移植肺の機能不全、移植後の入院期間、急性細胞性拒絶反応の発生率は、両群で同等であった。

結論 AE-ILD 発症時に移植を受けた ILD 患者は、病勢安定時に移植を受けた患者と比較して、全生存期間、グラフト機能不全、急性拒絶反応の発生率に有意差はなかった。今回の結果は、肺移植が AE-ILD 患者の治療オプションとして検討され得ることを示唆する。